

優秀賞

大阪府子ども会育成連合会会長賞

大阪府立 南大江小学校

四年 町中 さくら

ヘルメット着用率最下位は大阪、悔しくありませんか？

「はあ、はあ。習い事に遅れる。信号遅い、ああもう渡つちやえ。」

私は習い事に遅れると思ひ、信号が赤なのにも関わらず道路に飛び出した。と、その時、急に横から車が来てこちらに向かつて来る。

「きやー！」
と私が叫ぶ。キイーと車が音を立てブレーキをかけるが、車は止まらない。

「はあ、はあ、なんだ夢だったのか。怖かったあ。死ぬかと思つた。」

そう言う私の体は汗でびっしりだった。

だが、似たことが前にも一度あったのだ。習い事のバレエの帰り道、大きな交差点での出来事だった。私は自転車に乗っていた。

歩車分離式信号で、自転車の信号が青だったのに横から白い車が来た。後ろを走るお母さんが、

「信号無視！信号無視！」

と私に叫んだ。幸いひかれなくて怪我はなかった。しかし、この出来事で気が付いたのは、人間はいきなり危険なことが起きたら最適な指示ができなくなるということだ。

お母さんだって「信号無視」としか言えていなかった。本当は、「止まって」とか「進んで」のどちらかを私がいる場所に応じて言わなければならぬのに。さらに、私は車が来て止まっただけの「あ、車が来たなあ」とぼんやり思っていただけだった。あの時、いる場所が悪かったら、ひかれていたかもしれない。お母さんは前に階段から六段落ちて足首を骨折しただけでも車椅子をレンタルしたり、三年近く経つ今でも、まだ痛い日があつてリハビリに行っている。階段から落ちただけでもこんなに大変なのに、車にひかれた時のことを考えると、思わず身震いする。

そんなことがあつてからは、私は信号無視の危険さを実感し、自分の命は自分で守らなければいけないことに気が付いた。

だから、自転車に乗るときにはヘルメットをかぶることも忘れないようにしている。

自分の命を粗末にしないために。
相手の人生も守るために。